



Title	〔資料紹介〕 尊円親王筆能瀬切『古今和歌集』の新出断簡
Author(s)	寺田, 伝
Citation	詞林. 2017, 61, p. 40-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60674
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔資料紹介〕

尊円親王筆能瀬切『古今和歌集』の新出断簡

寺田 伝

能瀬切は、もと卷子本に古今集を書した断簡で、国宝手鑑である藻塩草に貼られるなど古来より珍重されてきた。当断簡については、以前、「尊円親王の能瀬切『古今集』について」と題した論文のなかで考察したことがある。古筆家によって尊円親王筆と伝えられてきた能瀬切の筆跡を、自筆署名入りの和歌懐紙と比較して、それが正しく尊円親王の真筆であることを指摘した。

伏見天皇の第六皇子である尊円親王は、日本書道史に大きな影響を与えた青蓮院流の開祖として知られる人物であり、その往時の筆跡を伝える真蹟として、能瀬切の資料的価値は高い。以下に、わずか二葉であるが、その後新しく管見に入った、田中登氏所蔵の断簡一葉と、思いがけず、稿者の所蔵になった一葉を紹介させていただきたい。いずれも書式筆跡からツレと思われるが、図版を末尾に附したので参照いただければ幸いである。

まず、田中登氏の所蔵になる断簡の書誌を示す。料紙は、

上質の鳥の子紙で、大きさは、縦25・0 cm×横20・9 cm。「青蓮院殿尊圓法親王雪のふ印」という畠山牛庵（二代）による極札が付せられている。全文は八行で、以下の通り。

雪のふれるをみてよめる

凡河内躬恒

雪ふりて人もかよはぬみちなれや

あとはかもなくおもひきゆらん

ゆきのふりけるをよみける

きよはらのふかやふ

冬なからそらより花のちりくるは

雲のあなたは春にやあるらん

内容は、古今集は卷六・冬の329番〜330番にかけての部分である。能瀬切の伝存範囲については、おおむね全体にわたっての分布が確認できるが、卷六の伝存はこれまで知られてお

らず、今後も新たなツレの出現を期待させる。一行目と二行目の間に紙継ぎがみえるのは、もと卷子本たる所以である。一行の幅を広くたつぷりと用いた、大振りで風格のある筆致は、まさしく親王による刻意の書と評せよう。

つづいて、架蔵の断簡について。こちらの大きさは、縦24・9 cm×横10・7 cm。古筆本家了音（六代）によって「尊円親王^{君か名も}印」と極札が付してある。卷十三・恋三の649番〜650番にかけての部分で、全文はわずか四行であるが、次のようになる。

君か名もわかなもたてしなにはなる
みつともいふなあひきともいはし
名とり河せゝのむもれ木あらはれは
いかにせんとかあひみそめけむ

本文についてみるに、二葉ともに定家本系統の諸本と一致しているが、ツレを含めて検討してみると、なかでも嘉祿二年本に近似していることが知られる。また表記も「平・貞・文」ではなく、「平・定・文」となっていることから、嘉祿二年本、あるいはそれ以降に校訂された定家本を写したものと推測されよう。

以上のごとくで、能瀬切は、尊円親王自ら書写したものであるがゆえに、今後さらにツレが見出されれば、それだけで尊

円親王の真跡資料がふえることになり、また、その依拠していた定家本の特定も決して不可能ではあるまい。さらなる断簡が一葉でも多く発見されることを期待して、紹介の筆を擱きたい。

注

〔1〕拙稿「尊円親王の能瀬切『古今集』について」（『国文学（関西大学）』99号、平成27年）。なお、前稿に対して、尊円親王の自筆資料として宮内庁書陵部所蔵「詠五十首和歌」があることをご指摘いただいた。お詫びして訂正申しあげる。

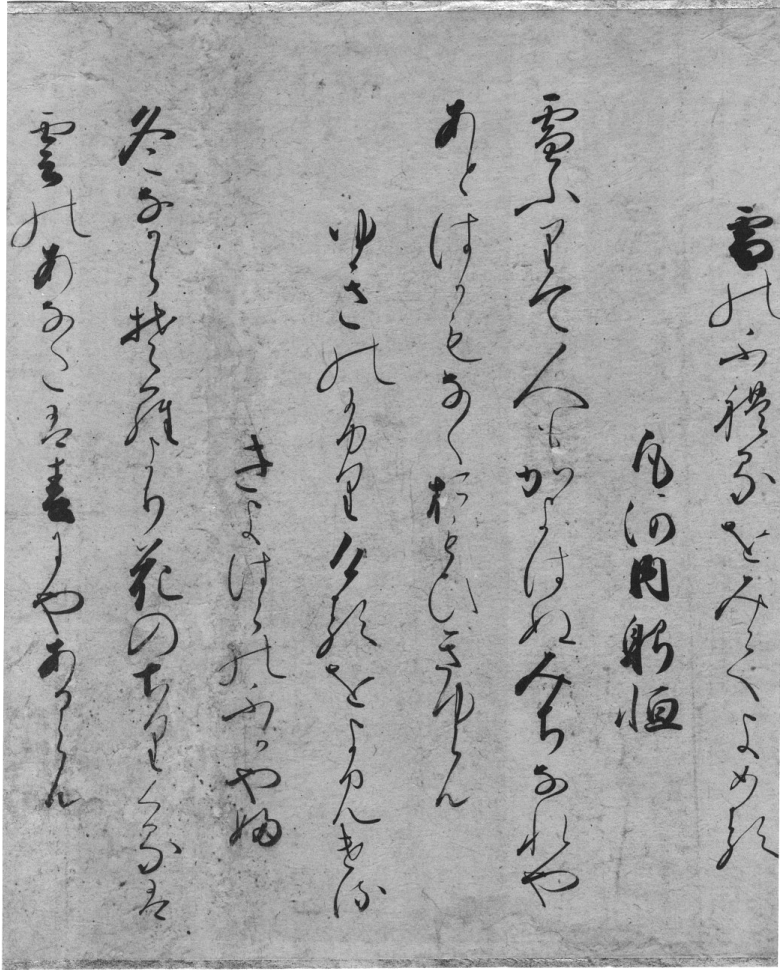
〔2〕片桐洋一「『貞文』『文屋』から『定文』『文室』へ―藤原定家の本文校訂、その一例」（『いづみ通信』20号、平成8年）。

附記 貴重な資料を調査・紹介する機会を与えていただきました、田中登氏に深く感謝申し上げます。また、前稿についてご指摘いただきました、先生方に感謝いたします。

（てらだ・つたう）

本学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員

【図版①】 田中登氏所蔵断簡



【図版②】 架蔵断簡

